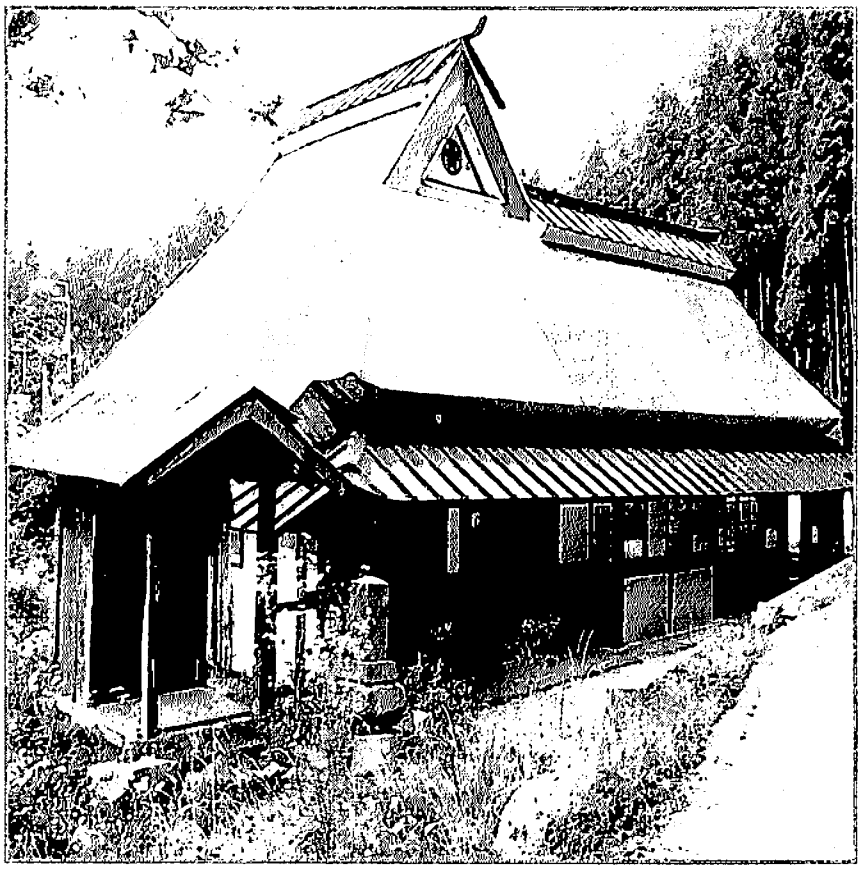
古民家再生プログラム



目次

一、はじめに

二、古民家

三、古民家のもてなし

四、古民家の生活

五、古民家と自然

六、古民家に伝わる伝承・暮らしの知恵

七、終わりに

一、はじめに

私たちは立命館大学のボランティアコーディネーター養成プログラムの授業の一環として、古民家再生プログラムに参加しました。

古民家を通して、地域性豊かな細川の風土・今日までの歴史的背景を学び、その土地の人たちと出会うことで先人の知恵や暮らしの文化を体験することができました。この冊子は、実際に古民家に住んでおられた81歳の方からの聞き取りを基にして、作成しました。環境への配慮・自給自足・地産地消などを始めとした地元学のコンセプトを踏まえた上で、古民家が現代生活の中で持つ意義を明らかにするとともに、その重要性を様々なかたちで情報発信することを目的としています。

二、古民家

玄関より撮影（地蔵・石碑）
現在(2008/07/16 撮影)

大津市葛川細川町（大津市の最北端に位置し、安曇川の東に八幡谷を挟んで点在する集落。昭和初期には四三軒・現在は二十軒）にある、約百五十年前に建てられた一軒の古民家に着目しました。若狭街道（通称　鯖街道）に面し、朽木・若狭そして京都へと南北に通じる中継点に位置しているため、行商人の通行が多い山村として栄えていました。メインの鯖街道は、ある程度身分の高い者しか通行できませんでした。また、集落の人々の日常生活を支える場所として重要な役割を担っていました。

この古民家に住んでいた人は、7人家族で、家の間取りは表戸を開けて入ると、土間が有りすぐ横には風呂場、左手は台所となっていました。大きな水がめ・カマドが有り、右手には囲炉裏・板の間・座敷・奥座敷（床の間）が有りました。また、家のすぐ隣には離れがありました。

裏手より撮影（全景）
現在(2008/07/16 撮影)

囲炉裏：冬は軒先まで積雪の有る地域なので、囲炉裏は唯一の暖房でした。（現在は囲炉裏が椅子の高さでタイル張りになっています。）囲炉裏の上の屋根裏を"アマ"といい、そこには干し柿や干し大根・栗（カチ栗）・栃の実などの保存食と"柴"などの保存・保管がされていました。また厨子・蚊帳があり、水路が溢れたときには、荷物を厨子へあげました。

風呂：この古民家では、毎日五右衛門風呂を焚いていました。各戸に風呂は無かったので、近所の人が入りにきていました。（当時の一般家庭は盆・正月という特別なときにしか、風呂を焚きません）

やりかけ：二畳ぐらいの大きさがあり、戦争のときに刃先をだしたので、柄だけが残っていました。

萱葺き屋根：現在はトタン葺きが主流です。萱の栽培が無く、また葺きかえる職人もいません。しかし、萱葺き屋根は風通しがよく虫害を防ぎ、保温性にも優れているため寒暖の差が少なく、日の光が無理なく注ぎこむよう、合理的にできています。何年かすれば、葺きかえなければなりませんが、一見無駄と思われることにも意味があり、大自然とのつながりが感じられます。

三、古民家のもてなし

家号「地蔵」・久保旅館と言いました。地域の人には、おおみや旅館（相撲取り・近江から）、また地蔵旅館（地蔵が家の隣にあるため、地域の人が勝手に名づけた）と呼ばれていました。

宿泊は常連客のみとなっており、一日に一人から二人程度でした。旅館の土間では、若狭商人と京都までの商人の商品交換などが行われ、商売の場という一面もありました。宿泊客は生活の必需品（もんぺ・醤油・竹輪・鯖・だしじゃこ等々）を宿賃の代わりにおいていきました。

客層：行商人

・若狭からの坊のおっちゃん（愛称）・・・家族の一員と思っていたほどの付きあい

・魚売りのやすはちさん・・・へしこ・鰊・鯖等

・越中富山の薬屋さん

・その他：呉服屋・・・小間物

金物屋

化粧品屋

左官屋

四、古民家の生活

細川では林業（板材）の生産や炭焼きが盛んであり、急峻な山道を越えて、安曇川まで運び、いかだを組んで流し、比良や小松港に搬出して生計を立てていました。しかし、時代の変化と共に採算が合わなくなり、1970年代、アメリカの木が輸入されたこともあり、林業が衰退していきました。

大正末期から昭和初期には養蚕が盛んで、織物は女性の仕事でした。京都が近いこともあって、金糸・内掛け・つつじの紋などの西陣織が主流でした。また、稲作・野菜畑・養鶏も営み自給自足の生活でした。

この地域で一般的に食べられていたのは、鮒・鯖・へしこ・猪・かしわ・じゃがいも・もみの木・棗などがあります。昔は竹輪が贅沢品として食べられました。

移動手段は徒歩→自転車→バイク→自動車と、時代に沿って移り変わりました。服装は着物を着て、藁草履を履いていました。天秤棒・わらじ・手甲・脚絆・箕の笠などの道具も使用されていました。

子どもの遊びというと、ブランコ・ままごとや桃の種を飛ばしたり、蛍を捕まえたり、鮎つりなどを楽しみました。冬は降雪量が多く、スキーをしたり、田んぼが凍るので、中に入って遊んだり、雪だるま作りや落とし穴を作って遊んでいました。学校は午前５時に家を出て、二厘半先の学校に徒歩で行き、到着は午前7時でした。制服はセーラー服（海軍服）で、昼の弁当はおにぎりと梅干が一般的でした。

病気のときは、病院が遠いため、また医者の数も少なかったので、病気で病院に行くことはありませんでした。子どもを生むときは、産婆さんを家に呼んで、家の中で生みました。また、死ぬときも、家で看取られました。

五、古民家と自然

湧き水 1枚目
現在(2008/07/16 撮影)

細川は、森林率が90%以上の、鬱蒼とした杉やヒノキの木立が聳え立っています。

細川は、比良山系が長く裾野を引いて、丹波山系に接近しており、そのため、安雲川が急に狭くなっています。このような地形から、川の細いところ-細川と呼ばれるうちに自然と定着し、それが今日の細川と呼ばれる由縁ではないかといわれています。

湧き水 2枚目
現在(2008/07/16 撮影)

頂上付近からは湧き水が流れており、安曇川に流れ込みます。水源は近辺の10軒の家々で守られており、今でも生活用水や郷の平の田んぼの用水として使用している家があります。ごぼごぼ水がわきでており、水温は年中12℃～13℃を保っています。昔は、旅人の一服の場所として用いられ、外の川にやかんを冷やしておき、皆が水を飲む(お椀が置いてある)水飲み場の役割を果たしていました。家の前には、水車があり(20年代)、きれいな湧き水を村の人の田んぼに供給していました。

昭和20年代の久保旅館
参考資料:OASYS001-00-18 より

山・川・大地などから、様々な恩恵を受けると共に、災害が多い地域でもあります。350年前には大水害があり、月山の梅ノ木が流されて、村一つ無くなりました。

昨今の自然変化に伴い、以前には見られなかった猿、鹿が山から下りてきたため、畑に囲いが必要（獣害）となりました。また昔はホタルがいっぱい飛び回っていましたが、今では一匹も姿が見えなくなりました。

六、古民家に伝わる伝承・暮らしの知恵

家のすぐ横には大きな一本杉・地蔵堂と石碑があります。

地蔵堂と石碑
現在(2008/07/16 撮影)

地蔵堂：お地蔵様の屋根の下は雨がしのげるほど広く、昔は乞食がよく泊まり、食事も食べさせてあげていました。また、お地蔵様は人々の待ち合わせ場所になっていました。今でも掃除をしたり、お地蔵様の涎掛けを作ったりして、大切にお守りされています。温井は安産地蔵・子安地蔵が有名で、女性が信心していました。

石碑：何百年前からあり、納骨は無く、四国参りなどに行って帰ってこなかった旅人を祀った碑です。

腰掛石：昔朽木の殿様が、上の見張り台に行く途中、休憩するために腰掛けたといわれる石です。

細川には独自の伝統行事が数多く伝わっています。山や川に対する自然信仰が篤いことが、特徴です。

・どんどは1月15日にあり、早朝に神主の家で種火を頂きます。

・伊勢講・愛宕講は1月と9月に行われ、山の神様を祭っています。

・地蔵盆　8月23日にあり、村中のお地蔵様を集めて祭ります。

・花笠踊り　昭和28年の9月15日に、八幡神社の屋根葺き替え工事を祝って開催されました。過疎化に伴い、若者や子供がいなくなったため、現在は10年毎に開催されます。

・放生会　9月15日に行われ、太鼓を叩いて準備ができたことを知らせ、親しい家々でご馳走（竹の皮におこわ・寿司・巻き寿司）を作り、やりとりを

します。

細川には昔からの言い伝えが、たくさん残っています。

「葛川では、小河過ぎれば、はらへらへら」…小河を通るころには、腹が減っている

「針畑男に、久多女子」…針畑には男前が多く、久多には美人が多い

・聞き取りをした家独自の生活教訓

「いつの世も提灯は必要だから提灯屋になれ」

「竹輪・鰊などをたくさん食べておけ、食べるものがない時代が来る」

「安雲川の土・石・砂が金になる時代が来る」

七、終わりに

聞き取り調査の終わりに

Q1:「昔と今で一番変わったものは何ですか？」

A:「人情」

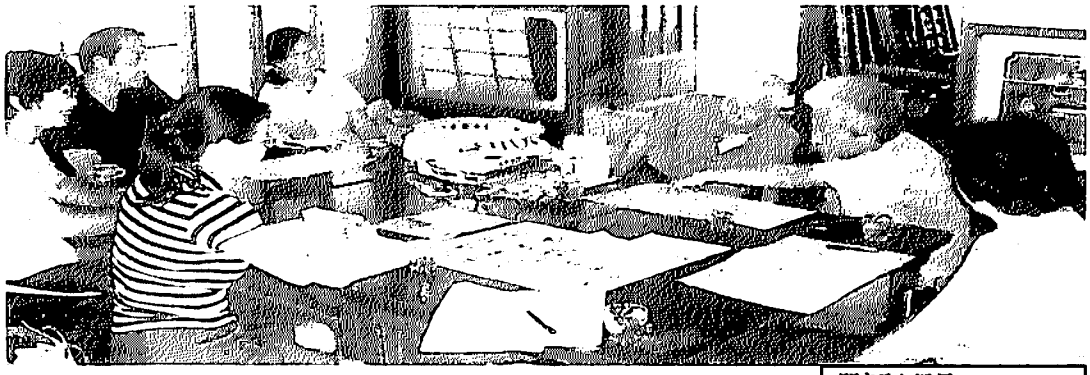
Q2:「何故、聞き取りに協力してくださったのですか？」

A:「このままお化け屋敷にするより、何かのお役に立った方が、ご先祖様も喜ぶ」

と答えてくださいました。

最後に、精神的風土のよさが暮らしの中で伝承されていることを感じました。温かい心のかよった人間愛が歴史の中で、次世代に引き継がれていくために、少しでも役に立つことができたなら嬉しいです。

『いろいろな歴史がある　歴史を彩った家』



聞き取り風景
現在(2008/07/16 撮影)

参考文献

「細川の歴史と伝承」 OASYS001-00-18

（注：この冊子の制作は、聞き取り調査を基に書かれています。）

協力　NPO 法人　子どもネットワークセンター天気村

制作者　立命館大学ボランティアコーディネーター養成プログラム受講生

飯島　雅彦

松本　孝子

坂田　真弓

小倉　久美子

西川　加奈子

作成日　2008年10月31日